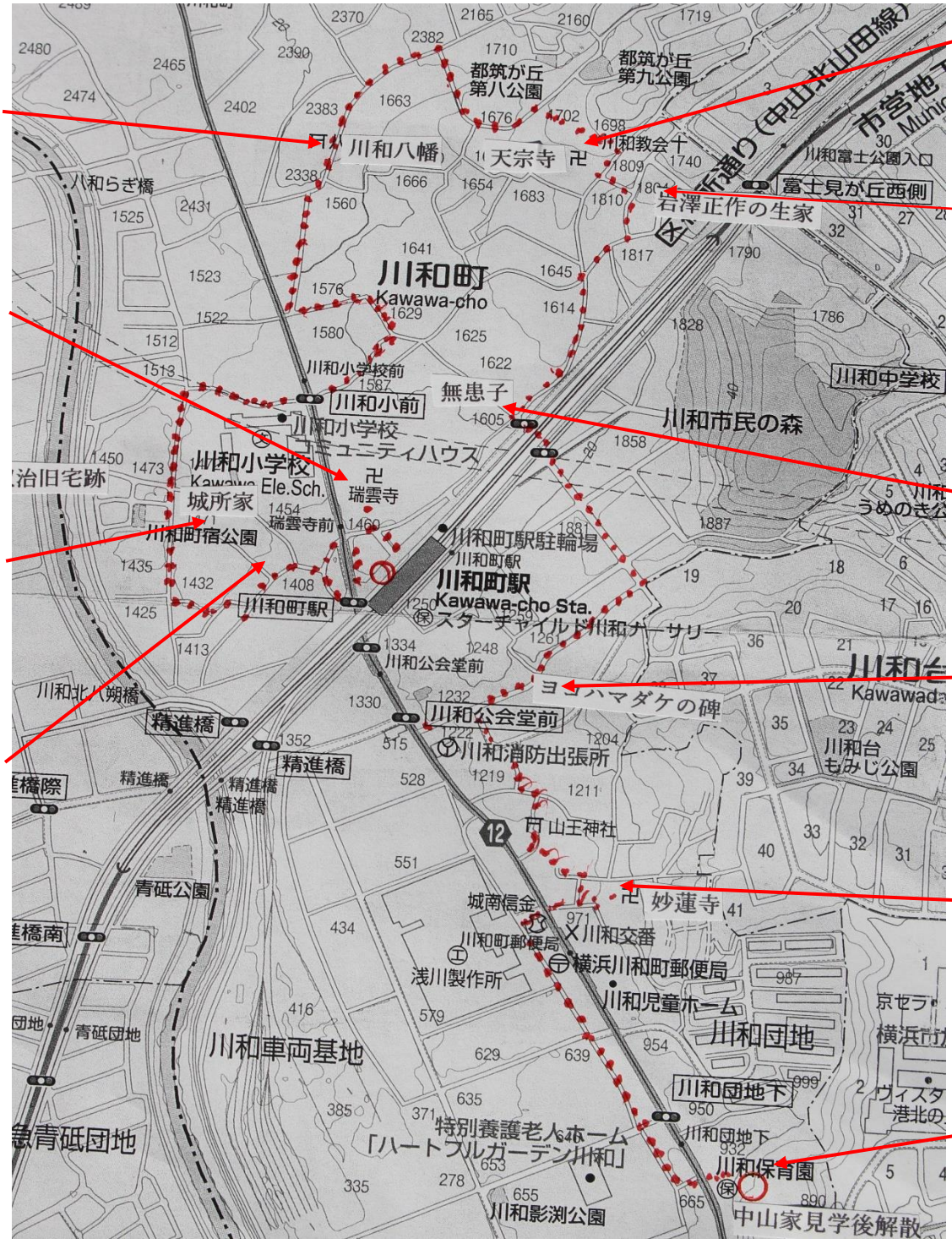
⑩都筑南部にゆかりのある人物を訪ねる

2020.10.28 秋山

催行日　１０月２８日（水）　集合：市営地下鉄グリーンライン川和町駅９：３０

行　程　川和町駅～瑞雲寺～道祖神塔～川和宿～城所家～八坂神社・天王様～旧前田収治医師邸跡～川和八幡～天宗寺～岩澤正作生家～無患子～松野重太郎・ヨコハマダケの碑～山王屋の蔵と井戸～妙蓮寺～中山恒三郎邸（見学後解散）

＊中川駅発９：08－川和町駅着９：20　中川駅発９：12－川和町駅着９：27



瑞雲寺

川和駅の西に落ち着いた臨済宗円覚寺派の寺院。本尊は東方薬師瑞光如来、開創年は歴応元年（1338）。医王院という山号がある山門を入ると右に筆塚があります。瑞雲寺では 50 年ほど前から筆供養が行われており、年末に使い古した筆に感謝をこめて、お焚き上げが行われています。寺の秘宝に薬師様の腕に鷹がとまっている「鷹薬師如来」があり、12 年に一度開帳されます。鷹薬師如来は、昔徳川家康が鷹狩りに出かけた際、日ごろ愛していた鷹が逃げてしまい、家康は大変惜しまれ、ひそかに薬師如来に祈願したところ、手元に戻った不思議な霊感を感じて、彫刻して寺院に祀ったと伝えられています。

瑞雲寺

筆供養

川和の市

地下鉄グリーンラインの川和町駅の西に、川和の「宿」と呼ばれる集落かあります。この宿で開かれた市は「川和の市」といわれ、近郷近在の人々の間で親しまれてきました。この宿の真ん中を八王子街道が通り、民家は広い前庭をとって立ち並んでいました。この各家の庭が、市の場所として使われました。

この市に行かなければ、正月の準備ができないとまでいわれ、歳暮や正月に必要なものを手に入れるため、農家では金を蓄え準備しました。宿の家々は、市の前の日の 24 日に、馴染みの商人を迎える準備をしました。店を構える場は、母屋の前庭や母屋でした。岸上興一郎の「川和の市」によれば、市商人は 25 日の早朝に、宿に入るのが習わしとなっていましたが、なかには古くからの関係で、前日の 24 日に入り、店を構える家に世話になりながら商品を整え、その家に泊まった商人もいたといわれています。

道の両側の庭に店を開いた

.城所家

城所家（きどころけ）の総本山とされる屋号「オモテ」では、商人のために布団を 40 組も準備したと伝えられています。店は午前 10 時ころから真夜中まで開かれま

した。このように賑わった川和の市は、昭和 30 年代から衰退に向かい、かつて 100 店を超えたものが、最終の昭和 42 年（1967）には２～３店になりました。衰退した主な理由は、横浜線の中山が急激に発展し、市商人が徐々に中山に移り、中山で市を開いたことがあげられています。

八坂神社・山王様

川和宿の中央に鎮守である八坂神社・天王様があります。幕末の頃、官軍の江戸攻めによる戦乱から難を逃れるため、知人を通して大神輿を引き取り、ご神体として祀っています。境内には二十三夜塔と力比べをした「天王様の石」と呼ばれる 24 貫（90Kg）の力石があります。真夏に行われる天王様のお祭りには、花籠を先頭に山車（だし）が出て賑やかです。

八坂神社・天王様

祭りの山車（だし）

川和の赤ひげ先生

川和には、赤ひげ先生と呼ばれる神様のように慕われた前田収治という医者がいました。先生は江戸時代末頃の生まれで、都筑郡の大半を馬に乗って往診していました。金持ちの人々からはきちんと薬代をもらい、貧しい人からは「金はいらないよ、よくなってよかったなあ」と診察代をもらわなかったり、農作物で薬代にかえたり、暖かく人間味あふれる人でした。お酒が好きで、晩酌をすると、誤診してはいけないからと見てくれなかったそうです。

先生の家は宿にあり、５代続いた医者の家で 8,000 平方メートルくらいの広い庭には、けやきの大木が茂り、通りから玄関まで石畳が敷かれていました。

家屋敷は、いまは駐車場と戸建て住宅地になっています。母屋の間取りは、特別診察室、土間の玄関、玄関間、仏間、客間が並んでいました。母屋の裏側には、みそ部屋(食料品の収納部屋)、お勝手、広間、中の間、それに床の間や違い棚がある部屋がありました。

前田収治医師

家屋敷

跡地

川和の八幡神社

古くは河輪神社といい、川和の氏神となっています。由緒や創立年は、はっきりしませんが、貞観 17 年（875）以前の創建と想定されます。明治 26 年（1893）年に八幡神社となり、大正９年（1920）に村社に指定されています。

境内には移転前の川和富士にあった「浅間大神」の碑、川和公会堂前にあった庚申塔などがあります。昭和初期に伐採されるまでは、当時関東一といわれた杉の大木がありました。樹齢が 1,000 年以上で、高さが 28 間（約 58m）、周囲が２丈４尺（約７m）もありました。

八幡神社

境内の石碑

今はなき杉の大木

天宋寺

岩澤山啓運院天宋寺といい、浄土宋の寺院です。本尊は阿弥陀如来。天文 8 年（1539）小机の泉谷寺の東誉（とうよし）上人の開山、翌年の村民伊左衛門の先祖が開基となっています。岩澤家の菩提寺で、檀家は限られているといいます。境内には江戸時代初期に川和から青砥への渡し船の土手にあった２体の地蔵のうちの 1 体があり、京保元年（1539）建立のものだといわれています。また、西国三十三観音の像や芭蕉 48 歳の時の句、元禄４年（1691）の句碑があります。

うき我を　さびしがらせよ　かんこ鳥

「世を憂しと感じて自ら選んだ孤独の境遇にあるのだが、閑古鳥（かんことり）よさらに寂しさを与えてくれ」という意

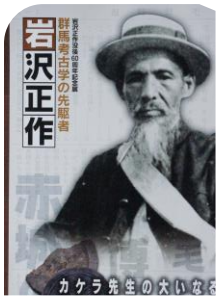
天宋寺

土手にあったお地蔵様

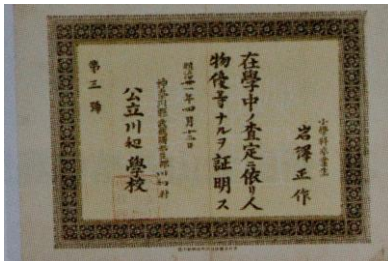
考古学者 岩澤正作（1876～1944）

植物学者の松野重太郎とともに川和村が排出した教育者に岩澤正作がいます。岩澤正作は、明治９年（1876）都筑郡川和村の農家の三人兄弟の二男として生まれました。明治 22 年（1889）４月、正作は、家の南にある川和学校（現在の川和小学校）を卒業しました。成績が優秀な子どもであったという。その後、東京に出て博物学を学んだ。明治 29 年（1896）に都筑郡都田村佐江戸（現・都筑区佐江戸）に設立された豊永小学校訓導として勤務しました。この時の校長がヨコハマダケを発見した松野重太郎です。また同僚に根本啓介がいて、二人で植物採集に地域を歩きまわりました。その間、「地質・地層巡検隊会」や「化石・岩石同好会」に入って研鑽に励みました。

その後、明治 34 年（1901）四国へ渡り高松中学に赴任、翌 35 年 26 歳のとき群馬県高崎中学に転任しました。その後、大正２年（1913）に妻の実家のある大間々の共立普通学校（現・群馬県立大間々高校）で博物、農学、漢文などを教えました。



岩沢正作



川和学校の成績優秀の証書

植物採集中の正作

岩澤正作はこれまで学んできた博物学の学識を活用し、いままでの郷土史家にない自然科学的手法で考古学研究を進め、群馬県における初期の縄文土器研究を主導しました。特に何層もの明瞭な火山灰層や軽石層に覆われた群馬の遺跡に着目して、火山噴出物を古墳の発掘調査と分析に応用した功績は、火山考古学の先駆けとなっています。正作の研究分野は、自然科学から郷土史、考古学と幅が広く、全国で初めて遺跡と火山灰との関係を明らかにするための古墳調査を行いました。昭和９年（1934）には昭和天皇の前で「群馬県の陸産貝について」と題した研究を発表しました。正作は自らの足で収集した多数の植物と鉱石の標本を、左江戸の豊栄小学校に寄贈しています。また正作が集めたものは、みどり市の大間々町博物館（コノドン館）と高崎市にある歴史博物館に納められています。

無患子（むくろじ）

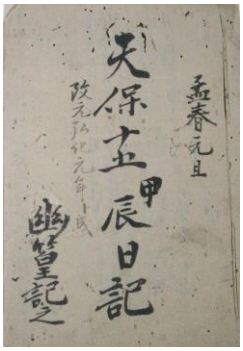
無患子の黒色の種は、お正月の羽子板の羽子につかわれます。この無患子を世の中に紹介したのが、郷土の教育者、植物学者、俳人の松野重太郎です。神奈川県史蹟名勝天然記念物調査員であった松野重太郎は、この無患子について樹高 16m、根周り 4.8m、地上 1.5m の周囲 4.8m、樹齢 300 年と報告しています。この他に川和八幡神社の大杉についても報告しています。

無患子

川和の信田日記

川和の名主信田太郎右卫門は、天保 15 年（1884）の元旦から大晦日まで、旅行で不在の日を除いて毎日欠かさず名主の仕事、事件、農作業、交友などを日記に記しています。この日記の特徴は毎日の出来事の他に、必ずその日の天候が記されていることです。

天保年間（1830～1843）は４年から６年まで、天候不順が続いたため、平年の３分から７分作で米価が騰貴し、棄子や行き倒れが多く、そこえ天保７年の大飢饉に見舞われ、全国的な凶作になってしまいました。その結果、物価騰貴のおさえなどと幕府が冷害や暴風雨で三分作であって、どの村も大いに荒れたことから信田太郎右卫門は、村の天候を必ず記したのです。



信田日記

ヨコハマダケを発見した松野重太郎

横浜市には、約 4,000 種の植物が自生していますが、数少ない「横浜」の名がついた植物の一つが「ヨコハマダケ」です。このヨコハマダケは、明治の末に都筑郡川和村の出身の松野重太郎により、横浜市西区戸部町池の坂で発見されました。松野重太郎は、この竹が川岸などに自生するメダケと違うことを発見し、当時の東京帝国大学（現東京大学）の牧野冨太郎にみてもらい、新しい植物であることが分かりました。ヨコハマダケは、川和町駅近くの新しい住宅になっている旧松野家の庭に移植され、かたわらに横浜植物会が建てたヨコハマダケの英語と日本語の学名を刻んだ記念碑があります。松野重太郎は「神奈川県植物目録」を出版するなど、植物界に多くの業績を残しました。

松野重太郎

よこはまだけの碑

牧野富太郎

妙蓮寺

城根山妙蓮寺は、都筑区唯一の日蓮宗の寺院です。境内には横浜市指定の名木のケヤキやイチョウの木があります。大晦日には 30 数年前から毎年恒例となっている、住職と弟子による「水行」が行われ、多くの人々が見学と除夜の鐘をつきに集まります。現在の川和団地のあたりには、以前に七面山という山があり、そこで国家安泰のご利益があるという、七面大明神をまつっていました。いまは山は取り壊されてしまい、平成 10 年に妙連寺の境内に「七面堂」が建てられています。

川和について

昭和 10 年頃の川和の町

川和町の「川和」は、河輪とか河曲のことで、水の流れが屈曲している意味といえます。明治 12 年に行政区画としての都筑郡が発足して、都筑郡役所が下川井村（現在の旭区）から川和村に移転してから、川和郵便局、川和警察署分署（当時は都田警察署）、川和登記所などの行政関係の建物、商店や旅館などが軒を連ねて、都筑郡の中心地として栄えました。

しかし、明治 41 年の横浜線が川和町を通らずに中山町を通るようになり、行政の施設もそちらへ移っていき川和町は寂れてきました。川和町に鉄道を通すためには、鶴見川と恩田川に二つの鉄橋を架ける必要があり、それを避けたためともいわれています。

川和の菊と第三代中山恒三郎

今日菊花展に出品されるものの多くは、大菊ですが、江戸時代後期から明治期は小ぶりの「中菊」が親しまれました。中菊は花が咲くと時間がたつにつれ花びらがねじれ、折れ曲がります。これを花弁の「くるい」と称し、様々な代わり咲き栽培が親しまれ鑑賞されました。朝顔と同じように江戸園芸文化の象徴でした。

都筑郡役所、警察署、郵便局など郡政の中心であった川和には、二カ所に菊園がありました。豪商中山恒三郎が経営する松林圃（しょうりんぽ）と県会議員を歴任したに中山良材家の虎渓園（こけいえん）です。第三代中山恒三郎は全国でも名高い菊の改良家でした。江戸時代の文政 10 年（1827）、幕臣松浦氏から菊花を譲り受け、新種育成に努力し、嘉永期には 300 たねにまで品種を増やしたといわれています。

中山恒三郎家は、明治 14 年(1881)に宮内庁に改良した菊苗 12 を献上したのが始まりで、昭和初期までに 83 種を献上しました。その中に昭和天皇が愛された名花「男山」がありました。菊班を観賞するために松林圃を有栖川宮をはじめ各皇族方、評論家、横浜の居留外国人など多彩な人が菊園に来訪されました。川和近在の小学生の児童たちも遠足で見学に訪れています。また、川和小と川和中の校章はこの菊にちなんでいます。

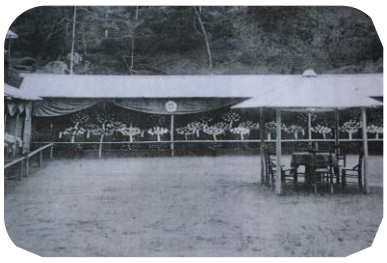
川和の豪商と言われた中山恒三郎家は、川和保育園になりましたが、書院や店蔵などが当時の面影を残していて、平成 30 年（2018）「横浜市認定歴史的建造物」に認定されました。

書院

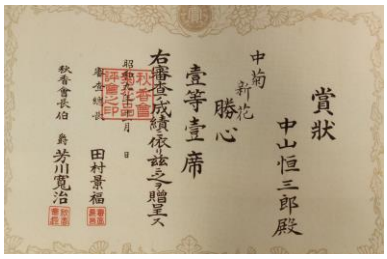
店蔵

認定のプレート

第３代目中山恒三郎



菊鑑賞会



賞状

中山恒三郎殿

中菊 新花 勝心

壹等壹席

右審査ノ成績依據之ヲ贈呈ス

昭和六年十月 日

秋香會 評會之印

審査委員長

田村景福

秋香會長伯爵 芳川寛治

＜参考資料＞

広く知られた「川和の菊」　相澤雅雄　　図説 都筑の歴史

松林甫　中山恒三郎家の記録（１）